



「ヤマセってなあに？」

2月28日、久慈地区地域づくり連絡会議（細田稔男会長）、「INS海洋と社会」研究会久慈支部（一沢明男支部長）、久慈地方振興局（山口和彦振興局長）主催による第2回地域づくり課題研究会（講演会）が村役場大会議室で行われました。

同研究会の講演会には久慈管内から関係者約50人が参加。東北大学大学院理学研究科附属大気海洋変動観測研究センター課川村宏教授の研究「ヤマセ（北東

風）とは何か？」をインターネットを利用してスライドなど、映像を通して説明（写真）。参加者たちはヤマセが、はるか遠くカムチャッカ沖やベーリング海、オホーツク海から流れてきて冷夏をもたらす様子に目を見張っていました。

ヤマセは予測可能ですか。—との問いに、川村教授は「現段階ではとても無理なこと。これからの研究課題です」と結びました。

久慈広域でヤマセは、「不思議の国の北リアス」のキャチフレーズで取り組みが進められています。ヤマセを逆手にとった研究成果が、今後期待されます。

緊急救命実技に挑戦



第二回子育て学習会「子どもの救急と看護—こんな時、あなたはどうしますか？」は、二月二十八日、村教育委員会（新沼敏哉教育長）主催で、村保健センターを主会場に行われました。幼児を持つ十五人が参加。久慈消防署救急救命士の佐々木裕之さんによる「緊急救命法の大切さ」と題した講話Ⅱ写真Ⅱに続いて「緊急救命の方法について」の実習が行われました。同実習は、佐々木救急救命士、普及分署横沢田勝彦署員、同署東潤一署員の指導を受けながら参加者全員で救命手当の基礎実技に挑戦。参加者の一人で上区の沢口千賀子さんは「初めて参加しました。緊急時には役立てたい」と、人の命がゆだねられる救命手当の重要性を再認識していました。

三陸大津波を忘れないで

昭和八年三月三日は、村民百三十七人の尊い人命と財産を奪った三陸大津波襲来の日。村ではこの恐ろしい津波の記憶を風化させないために、毎年住民参加の津波訓練を行っています。

三月三日、午前七時四十分、震度5に相当する地震が発生、直後に津波警報が発令されたという想定で訓練を開始。訓練には住民約五百五十人が参加しました。昭和八年から六十九年たった今、三陸大津波を体験した人が年々少なくなり、津波に対する危機感が薄れてきていることは確かです。災害は忘れた頃にやってくるという例えがあるように、相手は自然。教訓を忘れることなく生かしていきたいものです。

津波訓練だけが想定。けが人をタンクで安全な場所へ搬送する婦人協力隊（大田名部）

